

ふしちやうのたまご



むかしむかし、あるところに死なないトリがすんでいました。

それは、とてもきれいなトリで、なないろのはねをもち、きれいなこえでなくトリでした。

みんな、そのトリのことをふしちょうとよびました。

そのトリはいつまでも生きて、みんなのことをみまもりました。

「これが、そのふしちょうのたまごだよ」



あるとき、おじいちゃんがつこりわらいながら、てのひらにのせたちいさなたまごをみせてくれました。なないろにひかるふしぎなたまごは、とてもきれいでした。

「ほうせきみたいだね」

ぼくがそういうと、おじいちゃんは「そのとおり！」といわんばかりにうれしそうなおをしました。

「このたまごのカラーはとてもかたくてね、ちょっとやそつとのことではわれないんだよ」

おじいちゃんは「ほれ、このとおり」と、ゆびでたたいてみせてくれました。たしかにたまごはびくともしません。

「このたまご、いつになったら、ひよこがでてくるの？」

ぼくのしつもんには、おじいちゃんはおてんじょうをみあげて、いいました。

「さあてねえ」

「あした？ それとも、あさって？」

「どうだろうねえ……。このたまごはね、おじいちゃんのおじいちゃん、そのまたおじいちゃんのおじいちゃんがみつけたものなんだ」

「なのに、まだたまごなの？」

「ああ。だから、いつになったらひよこになるのか、けんとうもつかないなあ。そうだ！ おじいちゃんのかわりにたまごをあたためてみないか？」

「ええ?! ぼくが？」

とつぜんのことに、ぼくはおどろいてしまいました。だってそんなすごいたまごをあたためるだなんて、どうしたらいいのかわかりません。ぼくがこまっていると、おじいちゃんはわらいながら、いいました。

「なーに、しんぱいはいらぬよ。もっているだけでいいから」

「それだけ？」

「そう、それだけ」

こうしてぼくは、おじいちゃんから、ふしちょうのたまごをもらいました。ぼくはおじいちゃんがいったとおり、ずっとたまごをもっていました。そして――、



ドキドキ



わくわく



るるるん るるるん♪

スキップ スキップ

1にちがすぎ、1しゅうかんがすぎ、1かげつがすぎました。

たまごは、たまごのままでした。

ぼくはたいせつに、たまごをあたためつづけました。

1ねんがすぎ、10ねんがすぎ、そして100ねんがすぎました。
たまごは、たまごのまま、ぼくのこども、そのまた、こどもへとうけつがれていきました。



パパになったぼく



おじいちゃんになったぼく



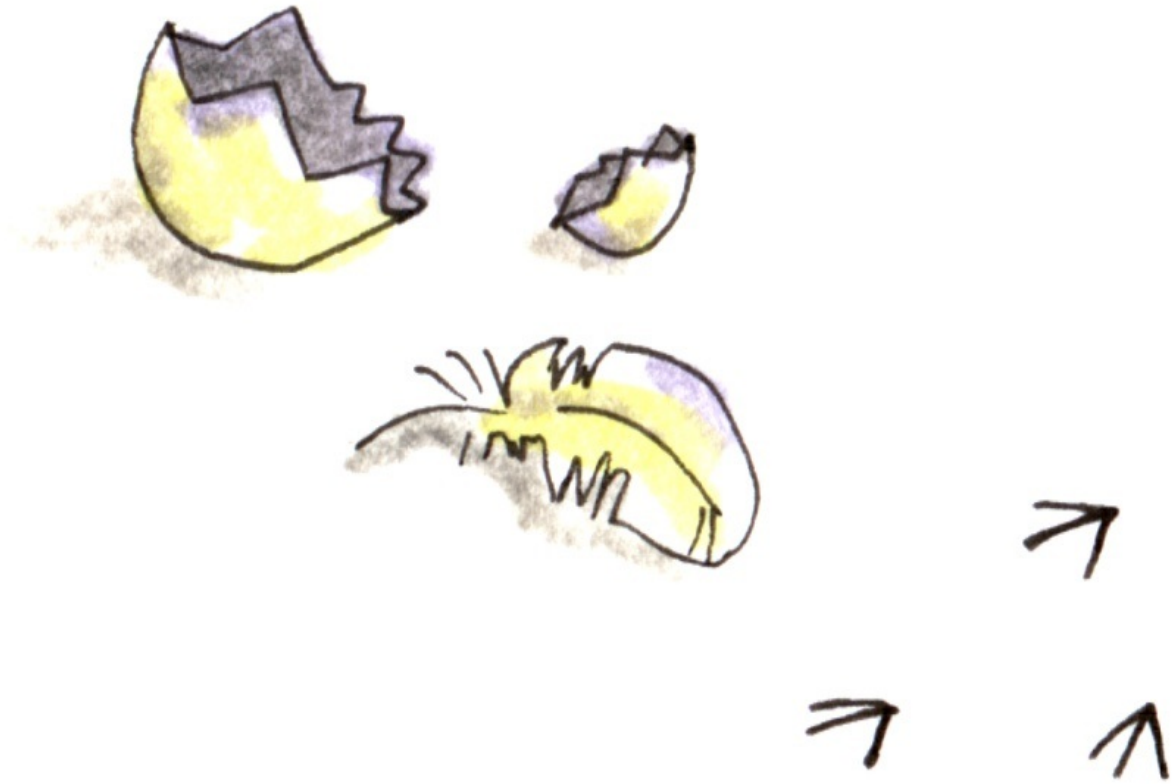
ぼくのこども



ぼくのこどもの、そのまたこども……

ふしちょうをみたいというユメとっしょに。
そして、

きがつくと、たまごのカラがそこにありました。



おしまい